

福祉教育開発センターシンポジウム
「平和と福祉」事前学習会
座談会「戦後 70 年を駆け抜けたソーシャルワーカー」
～岡山喜久治氏からのメッセージ～

語り手：岡山 喜久治さん（元・近江学園職員）

聞き手：山田 宗寛さん（社会福祉法人グロー・佛教大学非常勤講師）

清水 紗織さん（社会福祉法人しが夢翔会ステップ広場ガル）

進行：泉 洋一（佛教大学福祉教育開発センター）

○泉

ただいまより福祉教育開発センターシンポジウム「平和と福祉」第2回事前学習会を始めさせていただきます。本日、司会進行を務めます福祉教育開発センターの泉です。よろしくお願いします。

今日は2回目の事前学習会となりますが、9月13日の第1回事前学習会に参加いただいた方はどれくらいおられますか。ちらほらと…。その際『夜明け前の子どもたち』の上映とともに、山田宗寛先生と私とで、発達保障についての座談会をさせていただいた次第です。その時の参加者の感想を読んでもみると、なかなか内容が盛りだくさんでまとめきれずに…、というところがありました。山田先生のレジュメも含めて、おそらく3時間くらいかけてご説明いただけるような内容ということもございました。お手元にその時の配布資料も印刷しておりますので、参考にしていただければ幸いです。

さて、皆様のお手元のレジュメに糸賀一雄展の資料がございますが、2年ほど前の生誕100年祭の資料を提供いただいたものです。この中に今日ご紹介します糸賀一雄先生とか、田村一二先生、池田太郎先生のさまざまな経歴が書かれていますので、参考にしながら聞いていただければと思います。また、岡山先生にご用意いただきましたA3両面印刷の年表もございます。滋賀県の障害児・障害者の歩みということでもまとめたいただいたものです。

それでは本日のスケジュールを説明させていただきます。まずは座談会という形で、岡山先生を中心に『障害のある子どもたちの生活と職員の実践』に焦点をあてながら話を進めていきたいと思っております。講演形式でお話を聞いていただくという方法もあるんですけども、今回はできるだけ会場の方々にもご参加いただきながら、岡山先生にいろんな話、語りを引きだそうと考えております。特に今回は非常勤講師の山田宗寛先生、卒業生の清水紗織さんにもおいでいただいて、私を含めて4人、会場の方々も含めて、岡山先生を取り囲む形で座談会を進めていきたいと考えております。よろしくお願いいたします。

座談会の柱は6点ほどございますけれども、これを全部というのは時間の中では難しいかもしれませんので、進行に従ってということでご了承いただければと思います。終了は午後4時を予定しております。途中、適宜休憩を挟みながら進めて参りたいと存じます。

レジュメ2ページ目を見てください。テーマの『戦後70年を駆け抜けたソーシャルワーカー』は後藤先生が名づけました。このソーシャルワーカーは「福祉労働者」という意味合いで使用しております。事前学習会の趣旨は、戦後まもない頃の近江学園、その実践現場を支えた職員である岡山喜久治先生をお招きして、当時の障害のある子どもたちの生活や職員の実践の有り様について、卒業生と教員とで囲みながら座談会でお話を伺うことにあります。その前提に、今年の福祉教育開発センターシンポジウムのテーマ『平和と福祉』があります。みなさんもお存じのように、戦後70年を迎える中、国会で安保関連法案が可決されました。我が国が再び戦争をする国になりつつあるという危惧もございまして、戦後間もなく障害を持った子どもたちと生活を共にしながら福祉の実践を深めていった糸賀一雄先生、岡山先生の歩みを学びながら、私たち自身が今どうすべきなのかを考えたいと思い、企画した次第です。

今日のお話の中には、糸賀一雄先生、田村一二先生、池田太郎先生など、障害者福祉の先人が出て参ります。こういう方々の福祉労働の道すがらが、まさに平和と福祉の実践を体現したものであるということを岡山先生の語りから学びたいと考えました。学生ならびに卒業生には戦後の混乱した状況というのはなかなか分かりづらいと思います。今日はいろんなお話が出てきます。岡山先生自身、学徒動員という…（学徒動員がなかなか分からないかもしれないけれども、後ほど説明があると思います）。戦時中のお話から、戦後、近江学園で働き始め、その後、さまざまな施設を作っていかれた立場で、どんな仕事されてきたかということを、できるだけ分かりやすく映像等も使いながら進めていきたいと考えております。

最後に、糸賀先生が『福祉の思想』で訴えた発達保障の考え方でございます。戦中・戦後の混乱期から行動経済成長までの近江学園やびわこ学園などでの福祉労働から生まれたものです。それはまさに障害のある子どもたちと福祉労働者（ソーシャルワーカー）との「共生」（佛教大学では「ともいき」と呼びます）によって育まれた障害者福祉の思想とも言えます。今日の障害者福祉の実践の根底にある発達保障の源流を辿り、平和と福祉の実現に必要な社会の在り方を考えてみよう、というのが本日の趣旨でございます。糸賀先生の言葉「この子らを世の光に」もレジュメに載せておりますが、福祉の思想を見事に表現した言葉ですね。

それでは、まずゲストスピーカーの紹介をさせていただきます。岡山先生のご略歴につきましては3ページに簡単にまとめさせていただきました。なかなか1ページでまとめるのが大変でして、それだけ多くのことをしてこられました。

1962（大正15）年、福井県のお生まれでございます。同年に大正天皇が亡くなられていまして昭和元年です。戦時中は福知山工専から学徒動員で舞鶴の海軍工廠に行かれて、その際、船を造る作業で、エアハンマーを使った大きな音のする過酷な労働に従事されています。

その時に耳を痛めてしまったということでございます。戦後、田村一二先生の紹介で、1948（昭和23）年から近江学園で働くことになりました。その2年後には糸賀一雄園長から請われて、重度知的障害児のための「落穂寮」開設に携わっておられます。この頃、岡山先生は落穂寮の子どもたちの絵画を世に知らしめた『知恵のおくれた子らの作品展』を東京の東横百貨店で開かれました。障害のある子どもたちの芸術創作活動に着目されて、精力的に社会に開かれた活動を模索されています。この取り組みは美術専門誌『美術手帳』に紹介されました。

また、1958（昭和33）年からは糸賀園長の依頼（糸賀先生から岡山先生に「あそこへ行って来なさい」「新しい施設を建てなさい」ということ）で、いくつかの施設を建ててこられました。この時は「名張育成園」の開設に従事されました。1966（昭和41）年から1968（昭和43）年まで、糸賀先生からの再度の依頼によって近江学園に復帰をされて、発達保障の考え方に基づいた福祉の実践を深めていかれました。

その後、ここに書ききれないほどの職歴があるのですが、昭和55年「滋賀県立しゃくなげ園」、その後退職なさって「びわこ学園」で5年ほど専門員をされています。「こだま福祉会」等の立ち上げ、「おおつ福祉会唐崎やよい作業所」等でも働いてこられました。今現在は、「さわらび福祉会」「おおつ福祉会」の評議員をされています。いずれにしましても、第一線の現場で実践を積み重ねてこられたソーシャルワーカーでいらっしゃいます。岡山先生のエピソードはここにもご紹介しておりますが、糸賀先生の講演録を収載した『愛と共感の教育』の第2章に出てきます。後ほど清水さんから紹介があると思います。簡単ではございますが岡山先生の略歴でございます。

引き続き、今日の座談会に加わっていただきます山田宗寛先生です。本学の非常勤講師もしていただいておりますけれども、今は「社会福祉法人グロー」になっておりますが、信楽学園の園長もされていました。発達保障を含めて、糸賀先生、田村先生等のさまざまな実践について造詣の深い先生でございます。

お隣の清水紗織さんです。2年ほど前に本学を卒業されまして、現在は「社会福祉法人しが夢翔会ステップ広場ガル」の職員として働いておられます。実は、今日の午前中から一緒なんですけれども、かなり緊張されていましてね。でも大丈夫だと思います。本番に強い方なので。在学中は山田先生のゼミに所属し、なおかつ私のゼミに所属し、後ろにおられます鈴木先生のゼミにもおられたという、障害者福祉の王道を歩いて来られた卒業生です。

それでは、前置きはこれぐらいにして座談会を始めたいと思います。山田先生と清水さんにマイクをお渡しして、進めていただければと思います。適宜、私も入りますので。よろしいでしょうか。

○山田

みなさん、こんにちは。これから岡山先生のお話を聞いていくわけですが、なかなか学生の

みなさんは想像しづらいと思います。大正15年って、90年前なんですよ。岡山先生と僕の年の差も40歳ぐらいあるんです。それぐらいに、たぶん聞き逃すことのできない話しがたくさんあるんじゃないかなと思います。近江学園にはたくさん実践者と言われる方がいらっしゃいますけれども、存命の方は本当に少ない状況になっていますので、大変貴重な機会ではないかと思っています。とは言っても、糸賀先生、近江学園のイメージがないかも分かりませんので、2分だけ凝縮したビデオがありますので、それを見ていただいた後に、岡山先生から順次、お話を聞きたいなと思います。最初にビデオを見ていただきます。

〔ナレーション〕 子どもたちの教育と支援を通して戦後の復興に力を尽くそうと願う、3人の人たちがいました。教師をしていた池田太郎、福祉施設の運営に携わっていた田村一二、そして滋賀県の職員であった糸賀一雄です。糸賀らは大津市郊外の旅館を借り受け、戦災孤児と知的障害者のための入園施設「近江学園」を設立します。近江学園には戦災孤児と共に知的障害児15人が入園し、職員やその家族、そして生徒たちが寝食を共にし、一緒に生活をしながら教育をするという新しい試みが開始されました。糸賀一雄はその頃の日記に、自らの決意について次のように書き留めています。「私は、自分の全霊・全能力を傾けてこの事業を遂行したい。自分の一身の立場で、地位などは今は毫末^{ごうまつ}も考えていない。今こそ着手しなければ悔いを後に残し、その時に立って事を急いでももう間に合わぬほどの社会的な問題であると思う。その人は自分をおいて他にはいない。」糸賀らがもっとも力を入れたのは、生産教育でした。物を作る技術。社会へ出ても自立することを目指した実践的な教育。近江学園の取り組みはその後の日本の障害児教育を先取りし、多目的な役割を果たしていくことになります。(中略)

近江学園に続き、数々の施設や制度の設立を指導し、知的障害者福祉の父と呼ばれる糸賀一雄は、福祉施設の新任職員研修会での講義中に倒れ、翌日帰らぬ人となりました。

○山田

本当に簡単なんですけど、近江学園と糸賀先生のビデオの1つです。深く知りたいという方はいろんな本もありますし、身近な先生に聞いていただければと思います。今日のレジュメの中でもいくつかの言葉に触れていますし、また見ながら対談を聞いていただければと思います。よろしくお願いします。それでは早速ですけども、清水さんにマイクを渡してインタビューという形でしたいと思います。まだ、緊張してないよね？。大丈夫ですか。よろしくお願いします。

○泉

この後、前方のスクリーンにいろんな映像が出てきます。これは岡山先生のご自宅のアルバムにあったものを今回初めてデジタル化させていただいたので、おそらく見られた方はいらっ

しゃらないと思うんです。貴重な映像ですのでご覧いただければと思います。それでは、清水さん、よろしいでしょうか。

○清水

「ステップ広場ガル」で働いています清水と申します。今日はよろしくお願いします。

まず、近江学園に就職した頃のお話から伺いたいと思うのですが、どのような経緯で就職することになったのかということも含めて簡単にお話いただけますか。



岡山喜久治氏

○岡山

私は岡山と申します。先ほどの映像を見てますと、懐かしい方がいっぱい出てこられて、しかし、かなりの方が故人になっておられるなと思って。逆にそれだけ自分も歳を取ったなあと、つくづく感じております。今日はせっかくの機会ですので滋賀県のことを中心に置きながらお話していきたいと思います。

今日お配りしました資料、上下裏表1枚です。「滋賀県の障害児・者運動のあゆみ」となっていますが、これを見ていただきましたら、だいたい戦後の滋賀県がどのような形で、全国に先駆けて、福祉障害者問題を充実させていったかということが分かります。先程写真が出ましたが、池田太郎先生、田村一二先生からその源を発しています。それから、昭和55年4月に滋賀県共同作業所連絡会が、全国に先駆けて県に運営費を要求して、それができるようになっています。「物事をきちんと制度化していくこと」。決して一時的な気持ちでやるのではない。本来これは国と地方自治体が責任を持つべきものです。我々、気がついた者からやっていくが、あくまでもそれを“制度化”していくということを最初にお話しておきたいと思います。

近江学園の最初の頃ですが、多少前後いたします。田村先生は長いこと京都府庁の前にあります「^{しげの}滋野小学校」という所で特別学級をやっておられました。私はその頃からの知り合いです。田村先生に「滋賀県の石山学園をやるから夏休みに手伝いに来んか？」と言われまして、ちょうど僕は浪人をしていましたので、勉強がてら二ヶ月ほど石山学園に寄せてもらったことがございます。その後、池田先生の「三津浜学園」に。これは今で言う民間の虚弱児施設でございました。この時の石山学園も民間施設でございました。近藤壤太郎という滋賀県知事で立派な方がおられまして、その方が「糸賀、田村、池田で新しい施設を作ってくれるか」ということで、昭和21年11月15日に始まったのが近江学園の最初です。

琵琶湖から瀬田川に流れていく、その水を調節する南郷の洗堰という所に雅楽園という大きな旅館があったんです。私たちはここでの生活をどうしていくかということいろいろと苦しみました。戦後間もないですから食料も十分ではありません。本当に何もなし。紙1枚もなか

なか手に入らないような状態だったんです。それで、自分たちでやれることはやろうじゃないかということで、職員には三条件がありました。「耐乏の生活」「四六時中勤務」「不断の研究」です。この耐乏の生活で、その時は職員が30名くらいおりましたか、わずかなお金ですけど月給をいっぺん全部プールしました。独身者は月700円、家族持ちは月1500円、それで生活をする。私たちは家族全員が学園の中で生活をしているので、家族は家族舎というものをもらいます。大きな旅館ですから東屋みたいにくつがあるんですが、その小さな家に住んでおられるという状況でした。

比較的、(障害が)重い子どもたちというよりも戦災孤児です。戦争で親を失って、帰る家もなく、京都駅とか大阪駅(大津はあまりいなかったですけど)のホームで寝ころんでいる子どもたちを園長が見まして「こんなことではどうもならん」「これからの日本の再生は、子どもたちがしっかりと成長して、この国を支えていくべきだ」という気持ちを持たれて、田村先生、池田先生、3人に話をして、「やろうじゃないか」と始まったのが近江学園だったんです。

○山田

先生が就職をされた、その頃の様子をお聞きできればと思うんですけど。

○岡山

そうですね。始まったのは昭和21年なんですけど、私は23年に来ているんです。私が行くまでの2年間はもっと厳しかったと思いますが、私が行った時も、ないものづくしで困りました。初めはそれほど(障害が)重い子は来なかったんですけども、と言うよりは受け止められなかったんですね。その後、どんどん重い子も受け止められるようになって、確か、1部(戦災孤児、養護児。今日の養護施設にいるような子たち)が100人ぐらい、2部(知的障害者)が50人ぐらいでした。私は田村先生のお誘いだったので2部の指導員になったんです。ソーシャルワーカーなんて洒落た言葉で言われて最初はピンと来なかったんですけどね(笑)、要するに指導員です。近江学園には「さくら組」というのがありました。知能指数で言えば35以下の人たちです。近江学園のねらいは「しっかりとした力を付けて、世の中に子どもたちを送り出して行こう」ということだったので、150人のうち120人ぐらいは学園の中で努力してたんですが、その30人の「さくら組」は別の生活をしていたんです。重い子どもたちがみんなと一緒にやるのは無理だと、独立した施設を作ろうじゃないかということで、糸賀園長と相談しまして昭和25年5月にできたのが「落穂寮」なんです。

○泉

少しまとめます。学生の方も多いので。近江学園は職員が住み込みで働くということなんです。職員の家族もおられるので、家族舎に住みながら働いていたという所があります。それ

と、近江学園は最初から知的障害児の施設ではなくて、戦争孤児の方々もおられました。戦争孤児の方が1部です。2部が知的障害者の方々。多くは石山学園から移って来られたと聞いています。いろんな子どもたちが混在する形で始まったということなんです。だから、そこには職員の子どもさんもおられたんですね。そういう中で療育を始められました。そして、もらった給料をどんぐり金庫にみんなで溜めていくんです。その中で必要最低限、独身の方は700円、家族の方は1500円、これでひと月生活をしなさいと。それ以外はどんぐり金庫に貯めて、貯めたお金で新しい施設を作って行かれるという流れです。お分かりいただけましたでしょうか。どうぞ、清水さん。

○清水

今、先生が落穂寮の話に移られようとしたんですけれども、どのような経緯で立ち上げをされたのか、立ち上げの時に大変だったことをお話いただければと思います。

○岡山

昭和25年5月に落穂寮は出発したんです。私と初田春枝さんという、非常に優秀な方なんです。糸賀園長に呼ばれてね、「新しい施設を作ってくれんか」ということで行きました。4月下旬に糸賀園長が諄々とそういう話をされて、意中に感じて「よし、やりますよ」って、そのことをある先輩に話したら、「お前は若いから利用されてるだけで」って言われて（笑い）、「はあ、そんなもんかな」と非常に憤慨したんです。しかし、行ってから聞くよりも初めに聞いたならそのつもりでやれると思い直して頑張ってやったことを、今思い出します。

それで、行きましたら大変なんです。最初は12人ぐらいでしたけど、全然まとまりがないんです。「集まれ！」って言っても集まって来ないんです。どうにもならないんで困ったなあと。（近江学園は南郷にあって落穂寮はそれよりも下（しも）の方にあつたんです。丘の上にあつたんですけど、そこから田上平野を眺めると、ずーっと菜の花が満開でね、見事でした。余談になりますが。）ちょうどその頃、午前10時と午後3時の2回、おやつにしていたんですが、10時のおやつの前に、子どもたちに折り紙ぐらいの大きさの紙を与えて、それに「クレヨンでどんな色でも良いから、全部、白いところがないように塗らなさい」「塗れたら出しなさい」そんなふうと言って。なかなか塗れないんです。クレヨンを持った事がない子もいました。紙を破ってそれを口に入れるような子もいましたし、ちょっと想像がつかないような状況でした。でもみんなおやつが欲しいんです。おやつが欲しいから、折り紙ぐらいの紙に一生懸命色を塗るようになってきたんです。その次に私たちは、できるだけ綺麗な色を使おうということで、赤とか、緑とか、青とか、そういう色を使うように指導していきました。

ちょうどマジックが出た頃です。マジックで△、○、□を書くんです。でもマジックは幅が太いです。だから、「この幅を出ないように色を塗って来なさい」と言ったんです。そうする

と、ある程度子どもたちは今までの習慣から理解できてきましたから、そこで止めようとするわけです。自分で自分をコントロールするということに繋がっていったと思います。それができるようになったら、次は簡単な塗り絵のような絵を描いたんです。初田先生は絵が上手だったんで描いてもらって、印刷して子どもたちに渡すんです。それにいろいろと色を塗ってきます。「ここはこんな色、ここはこんな色」って言っているうちに、だんだん分かるようになってきて、その後はだんだん紙を大きくしていきました。折り紙をA4ぐらいにして、A4がある程度埋まるようになってきたらA3の大きさにする。それでだんだん慣れていくわけです。その時に僕は、子どもたちに潜んでいる力がすごくあるんだなと、私たちはそれを引き出していく方法をしっかりと学んでいかなければいけないなということを非常に感じました。

それで、ある程度できるようになりますと、クレヨンを渡しておきます。15～20人ぐらいいたんですが、そういうことにきちんと反応が返ってくるのは10～13人ぐらいです。みんながみんなそういうわけではありませんでしたが。そうして紙を渡しておくと、A4ぐらいの大きさに素晴らしい絵を描いてくるわけです。これは僕らが指導するべきではない、「みんな好きなように描きなさい」というふうになりました。それで、A3から今度はその倍の大きさ、模造紙の1/4、半分、全紙を渡しました。描く材料も、クレパスから絵の具にしたり、マジックとかいろんなものを渡したら、どんどん素晴らしいものができました。それを、ご存じの方もいるかと思いますが、精神科医でゴッホを日本に紹介した式場隆三郎さんという方がたまたま見に来られていて、「これは素晴らしいよ」「ひとつ、紹介するからやろう」ということで、33年に東横百貨店で『知恵のおくれた子らの作品展』をやりました。たくさんの方が来られまして、秩父宮妃殿下も来られたり、育成会からも来られたりしました。それを今度は『美術手帳』の出版社が見て、『知恵のおくれた子らの作品集』という1冊を出してくれました。これは非常に良い本ができたと思って、いろんな人に貸したら返ってこないんですね（笑い）。今は残念ながらないんですが。こういう経過です。

○山田

今の落穂寮にいた時の取り組みなんですけども、岡山先生、落穂寮にいたときの最初の職名は主任でしたよね。27歳ぐらいですか。

○岡山

落穂に行った時は、そんなもんやな。

○山田

岡山先生は新設の施設に27歳ぐらいで行って任されたというか、立ち上げに関わられました。当時、障害のある人は能力そのものが低いと見られていたところで、絵を描くという指導

をされたんです。式場隆三郎って言っても分かりにくいかもしれませんが、山下清を全国に見出したりした人です。東横百貨店は、美術館が今ほどある時代ではないので、百貨店で展覧会をするというのは本当に有名になるということですし、『美術手帳』という本は福祉の方はあまりご存じじゃないかもしれませんが、日本の美術専門誌の中では著明な本で、そこに福祉ということではなく絵が紹介されることになったんです。絵を描こうという指導ではなくて、子どもたちの要求を育てた結果、絵が描けるようになったということ、27歳の岡山先生は昭和の最初の頃に実践されていたということです。



山田宗寛氏

○清水

子どもたちの能力を引き出すことについてなんですけど、糸賀先生はそのことについてどのように思われていたのかとか、糸賀先生についてもお話をしていただきたいと思います。

○岡山

糸賀先生は鳥取県出身なんです。子どもの時は比較的ひ弱な消極的な方だったようです。非常に頭が良くて、勉強は良くできたようです。四高を出られて京都帝国大学で宗教哲学を専攻しておられます。糸賀先生は非常に気骨のある先生だったと思います。成長されるにつれて、ご自分の考え方をしっかり持たれるようになってきました。その経過の中で、京都の室町教会（日本基督教団）に属しておられたんですが、その信仰が糸賀先生を強く支え、ご自分の人格形成を助けた、というのはおかしいんですけど、そこで養われたんではないかと思います。糸賀先生が良くおっしゃっていたのは、「決して人に妥協してはいけない」「自分の考えというものをしっかり持ちなさい」。カントの判断力批判じゃないですけども、「判断力が非常に大事だよ」と、良く教えられました。それから「情熱を持った人間が歴史をつくる」ということも良くおっしゃっていました。当時、国鉄の総裁で十河信二という方がおられたんですが、この方が糸賀園長に「情熱を持った人間が歴史をつくる」という掛け軸を贈られています。それから、糸賀園長は人を大事にする人で、ええ加減なことで返事をするということはありません。じっくりと聞いて、「それは君、おかしいんじゃないか」「これはこうじゃないか」と、必ず問い返してくれたりしました。国の中央児童福祉審議会や精神薄弱者福祉審議会（現・社会保障審議会）にも出ておられて、国の福祉や障害者の政策づくりにも大変力を入れられました。先ほど言いました「行政が責任を持つ」ということをご自分の身をもって、自ら努力をされて、精神薄弱者福祉法（現・知的障害者福祉法）を、もちろんお一人じゃないでしょうけど、その後、気を配りましたいろんな法律に基づく施設ができております。

○山田

今日来ていただいている学生のみなさんが、これからいろんな糸賀先生の本を読んだりすると、出てくる言葉がいくつもあると思います。それを岡山先生は目の前にして聞いてられまし、また、岡山先生と仕事をしていました僕ら世代も聞いていますし、そしてみなさんに引き継いでいく。語り継ぐ中身としてそういった言葉がたくさんあります。

そして、なんども繰り返されていますけれども、佛教大学で大事にしているのは「現場」とか「実践」ですけど、もう一つが「制度化」です。制度化するということは普遍化するというか、ずっと残っていくということですので、それを貫いておられたということです。それは本で分かることだと思うんですけど、これから勉強していくうえで、糸賀先生のイメージとか、人となりやを直接聞くことがないと思うので、いくつかエピソードを聞けたらと思うんです。先生が園長室に入った時の話とか、岡山先生と糸賀先生は10歳ぐらい違うんですか。

○岡山

そうやな。大正4年やろ。12、3歳違う。

○山田

そうですね。そういう職場の先輩であったと思うんですけど、少し糸賀先生の印象じゃないですけど、1つでもお聞きできたらと。

○岡山

難しいけどな。先ほど言いました、人を大事にされる方だったと思います。だけど、間違ったことについてはきちんと指摘されました。身内と学園の職員と分けるというんじゃないんですけど、身内の職員も大事にされて、身の上相談に行ったら親身になって「こうしたらどうだ」「ああしたらどうだ」と教えてくれましたが、それ以上に余所の人を大事にされました。見学に来られた方、よく婦人会で来られるんですけど、そのおばさんたちにも、丁寧に、分かってもらえるように、説明をされていました。余所の人を大事にするということではおかしいんですが、私も近江学園からいくつかの施設を回らして、三重県名張市に「名張育成園」がありまして、今は大阪の衛星都市みたいになってますが、私たちが行った昭和33年頃は甲賀の山奥で、それこそタヌキなんか良く出てくるようなところでした。その甲賀の施設に行っていて、私の子どもも、2、3歳ぐらいだったかな、連れて近江学園の糸賀園長室で話をしていたら、その子どもをあやしながら、私も良い意味での余所から来た職員ということで、大変丁寧に接してくれたことを覚えています。個人的な話で分かりにくかったかもしれませんが、それほど人を大事にする人だったと思います。

○山田

清水さんは職場で大事にされてますか。

○清水

されてると思います（笑い）。

○山田

「福祉は人なり」って良く言いますけれども、糸賀先生は最初からそういう実践をされてましたし、僕も一応、岡山先生に大事にされていた気がします（笑い）。滋賀県の福祉は「人を大事にする」。その基本は佛教大学でも生かされていることだと思います。

先生に糸賀先生のことをお聞きして、名張のことも少しお聞きしたんですけども、先生がもう一度近江学園に戻って来られたのが昭和40年代ですが、そのきっかけとか、初田さんのこととか、いろいろあるので。

近江学園でどんな実践をしていたのか、指導ってこんなことなんかなってイメージしてもらいやすいと思いますので、糸賀先生の最後の講演集『愛と共感の教育』（柏樹社）の中の一節を清水さんに朗読してもらいます。

○清水

それでは糸賀先生の講演の一節を朗読します¹⁾。

（朗読）「初田先生に世話になっていた1人の精神薄弱のかなり重症の子どもさんがいました。タダシちゃんという子どもさんでしたが、今は奈良の方へ帰っています。これは昔で言う白痴程度の子供でした。モンゴリズムと言うでしょう。よく蒙古症と言う。これはどうも民族的に大変失礼な言い方になる。モンゴリズムなんて言うよね。ダウン氏症候群なんて言うと、これまた難しいし、とうとうモンゴちゃんと言ってしまっているのですが、このタダシちゃんという子はとても愛嬌があって、ちっちゃい時から長いこと近江学園にいたのですが、昭和25年に落穂寮というものをこしらえました時に、そこにタダシちゃんは白痴の子どもたちと一緒に移っていった。その落穂寮の初田先生と岡山先生。岡山先生は男の先生で指導員で、保母先生が初田先生でした。この2人が参りました。一番最初は近江学園の桜組という13人ほどの重度の障害を持っているグループでした。そのメンバーの中にタダシちゃんがいたのです。とってもモノマネが上手で、その頃、進駐軍が日本におりました。進駐軍の人が良く来ると英語でしゃべるでしょう。タダシちゃんも英語でしゃべるのが上手でした。英語が何か知りませんが、バラバラやっちゃうわけなんです。進駐軍ばりで大げさな格好をして、肩をすくめて、手をこうやったりなんかしてですね、いかにも愛嬌たっぷりでした。薪割りが得意で、私たちが行きますと、すぐに腕を引っ張って行って、自分の仕事場に連れて行きまして、そして、パー

ン、パーン、割ってる。そのところを見てほしい。その実績を見てほしい。褒めてほしいわけなんですね。それで褒めてあげると言うことになるのですが、このタダシちゃんには非常に残念なことが1つあるのです。それは指導員の先生を大変尊敬しているのですがね、岡山先生はその当時長髪でしてね、仕事をしているでしょう。すると髪の毛がぱさっと降りて、時々手で上げるとすっと上がります。これをタダシちゃんがモノマネをしたいのだけれども、散切り頭ですからそれができない。私は後で思ったんですけれども、タダシちゃんにとって、おそらく一世一代の英知を働かしたことが1つあるのは、ある日のこと、初田先生にタダシちゃんが頼みまして、前の方で日本手ぬぐいを持ってきて、額で結んでくれと言って結んでもらいまして、端っこをタラッと垂らしたわけなんです。それから薪割りをするんです。パーンとやって、それから勢いよく頭を上げるわけなんですね。そうすると垂れているのが後に行くんです。それでようやく心の満足を得たわけなんです。」

○山田

はい、情景が思い浮かびますか。

○岡山

それをね、ハンカチで実演するとこんな感じなんです（笑い）。手ぬぐいをこうやりましてね、手ぬぐいですから長いでしょ。長いところをクルッと巻いて、前へ持ってきて、垂れてるのを「ぴゅっ」とこう。垂れた手ぬぐいの端を自分でこうやるわけです。そうするとこれが後ろに行くでしょ。私もそこは覚えてないんですが、その頃ですからガスなんてありません。薪で炊いていたわけですね。薪を割って、毛が伸びててだいぶ長かったから邪魔になるので、この毛をこうやるわけですね。それを真似して手ぬぐいでやってるっていうのが今の話しなんです。

それにかこつけるわけではないですけど、ダウン症の子どもでしてね、初めは言葉も私たちにはなかなか分からなかったんです。発音もだんだん明確になってきて、知恵も付いてきて、そして今言ったような人の真似もできる。知的な障害、特に重度の人たちは、きちんとした指導と、繰り返し、繰り返し、関わることで、必ず伸びていくんだと。成長するんだと。つまり、発達していくということを、子どもたちなり仲間たちから、大変多く学んだことを覚えています。

○山田

薪をたくさん割るということだったら、一生懸命やりなさいという話しですけど、子どもの動作をしっかり捉えているということですし、糸賀先生もそれを見て原稿にしている。初田さんという保母さんも何回か出てくるのでまた触れていただいたら良いと思います。言い方はあ

れですけど、面白がるというか、近江学園の職場全体には温かく子どもたちを迎え入れるような雰囲気があったということです。

先に言ってしまうと、初田さんというとても優秀な保母さんがおられたんですけど、喘息でお亡くなりになられたので、糸賀先生に「戻ってきなさい」と言われて、岡山先生は昭和40年代になってもう一度近江学園に戻ってこられたんです。

一度、休憩を。

○泉

休憩に入る前に。糸賀先生の著作というか講演の中で、例えば「白痴」であるとか、「精神薄弱」であるとか、今では「知的障害」という言葉に変わりましたが、当時はそういう言葉を使っていたということです。その点ご理解いただければと思います。

－休憩－

○泉

それでは座談会の続きです。前半は、近江学園に勤められた経緯であるとか、近江学園から落穂寮という比較的重度の障害の方々が入所された施設に移られた経緯だとか、あるいは名張育成園ですね、今も名張のちょっと山奥にありますけれども、そういう施設で務めてこられて、近江学園に戻られたというところまでのお話でございました。

糸賀先生のお話に関しては、おそらくいろんなことをご存じなんですけど、みなさんの前で話できることと、できないことが少しあるのかなと思いながら。私は是非、糸賀先生がお酒が好きだったという話を聞きたいなと思っているんですが、また後半で出てくるかもしれません。では引き続き。

○山田

今日は『岡山先生からのメッセージ』とサブタイトルにもありますので、近江学園が始まって、福祉の支援とか、実感を持って学んでこられた、大事にされていることなどを聞ける方が学生のみなさんにとっても良いことがたくさんあるんじゃないかと思っています。何でも自分の言葉でしゃべることが大事なので、今からちょっと振って悪いんですけど、清水さんが、自分が卒業して現場に出て、という所も含めて、岡山先生に質問をしながら、糸賀先生のこと、近江学園のことを聞けたらと思います。



清水紗織氏

○清水

私も今、重度の障害の方がいる施設で働いているんですけども、言葉がない方もいらっしゃるって、その方たちがどのようなことを考えているのか、その方の力を引き出すにはどうすべきなのか、どう接していくのがいいのか、と自分の中で悩みながら毎日支援しているところがあります。岡山先生が今まで子どもたちとの関わりの中で大事にしてきたこと、どのようなことを考えながら子どもたちと接してきたのかというお話を伺いたいと思うのですが、いかがですか。

○岡山

難しいね（笑い）。非常に難しいのね。基本的に、私は子どもが好きだというのが小さい時からあったと思います。だから、どうですかね。知的な遅れの子どもたちと接していると、駆け引きのない子どもたちの気持ちが私にぶつかってくるんです。受け止めがたいほど厳しいものもありますけど、ありがたいなと思います。どういうふうに言っているのか難しいですけど、間違ったことをした場合にはその場できちんと教えないといけないと思います。その時にこちらが感情的になって叱ったんでは子どもが受けれてくれないと思います。じっくりと「あんた、あんなことしたらあかんのとちがうか」、そういう説明をしてもどこまで理解しているか分かりませんが、それでもジェスチャーを入れたり、体を触ったりしながら、「これはいけないんだよ」と教えていくことが大切だろうと思います。障害のかなり重い子どもでも、私なら私の表情を読むことはできると思いますし、そこに本当に人と人との深い繋がりが生まれてくるものだと思います。何か難しくて返事にならんかもしれないけど、そんな気がしますね。

○清水

表情を読むということで、今まで難しいと思ったことはなかったんですか。

○岡山

難しいことばかりやん（笑い）。その頃の子どもたちは生活を一緒にしているので通ってくる子どもはいないんです。ですから、子どもによっては入ってしばらくして「家に帰りたい」という気持ちがあると、わけも分からずに飛び出して、本当は石山の方へ向かわんなんのを奥の方に向いてね、それこそどこに行ったか分からないということで、よく探しに行きました。これはなかなか大変な仕事です。それから、前に瀬田川がありますので、瀬田川に入ってしまったって不幸にして亡くなった子もありました。

○山田

先生はそうやって70年間、福祉に携わっておられますので、経験や歴史をお持ちだと思います。何もないところから今の障害者福祉やいろいろな福祉が生み出される時に、岡山先生をはじめとする実践者の方々がその礎を築いたと。岡山先生は自閉症の人も担当もしてはって、昔は煙草も吸ってたそうなんですけど、岡山先生が禁煙をしたというエピソードがあるんです。煙草を辞めた話は覚えてます？

○岡山

そんなん覚えてへん（笑い）。

○山田

以前、僕に話してくれたのは、自閉の子が大変やったので煙草を吸う間がなくて結果的に辞めたと。

○岡山

とにかく子どもたちと一緒に暮らしてるわけですから、いろんなことで目が離せないわけです。ですから、「煙草もいらんな」と思ってた頃やと思いますけど、そんなことで煙草を辞めたことは確かにありましたね。

○山田

近江学園に戻ってこられてさまざまな実践をされたのが1960年代なんですけど、その頃に「発達保障」という考え方が生まれました。近江学園は県立なので異動があるわけです。当時は滋賀県にいくつか入所施設があって、「信楽学園」「近江学園」「しゃくなげ園」。岡山先生は最後に「しゃくなげ園」の管理職で退職されて「びわこ学園」に行かれているんですけども、就労支援に関心のある学生のみなさんもいるかもしれません。「しゃくなげ園」におられた時に子どもたちを就職させた話を少ししていただければと。

○岡山

その頃の県立の「しゃくなげ園」は、近江学園とは違って比較的（障害の）軽い子どもたちが70人ぐらいおったのかな。そこは基本的に男性だったんですが、私が行く2、3年前から女子が少しずつ入ってくるようになりました。そこの職員は園生を就職させようという気があまりなかったんですね。これはいけないと思いまして、日常生活の時間割に作業の時間を位置づけて、「1日にこれだけはやろうね」というノルマも作りました。それができたら大いに評価してあげるということをしていく一方で、「しゃくなげ園」は日野町にあるんですけど、日野

町の商店街の方とか、お医者さんの家とか、絶えず行って、「こういう園生がいるんだけど就職させてくれないか」と、そういう努力も一方でやりました。そしてだいたい3年半ぐらいでしたか、約50人の仲間を就職させたことがあります。私は就職させたことが決して良いとは思っていません。そうじゃなくて、その仲間たちが、自らの気持ちで生活を作っていく。自分たちで生活を作り自立していく。この点が大事なんだと思うんです。だから、そういう気持ちを絶えず引き出していく努力を職員はしないといけないんじゃないかなと思います。

○山田

ありがとうございます。今のは1980年代ぐらいの話なんです。制度上は今の就労支援に繋がっているんですけど、岡山先生は、就労させるだけじゃなくて、近江学園からずっとされてきた、自分たちの力で生活を作っていく、発達していくということを貫いて実践をされたということです。学生のみなさんは現場実習での経験だったり、働いている方も今話を照らし合わせていただけると学べるところもあるのかなと思います。

ただ子どもたちを指導してたとか、ただ子どもたちが施設で過ごしていたじゃなくて、その子どもたちの要求とか発達、能力を高めましようということをされてこられた。その技術が滋賀県の中では伝承されていて、今の言葉で置き換えると専門性というんですけれども、今日のタイトルのように、専門的な支援を近江学園の中で作ってきた。それが形になって今の制度になっているという話だと思います。そういうことも合わせて、近江学園に始まる実践があったということを考えていただければと思います。

最後に清水さんから話をしていただいて、会場のみなさんと少しディスカッションできたらと思います。お願いします。

○清水

近江学園の話から始まり、岡山先生が実践の中で大事にされてきたこと、特にその子たちが持っている能力を引き出すことが大事だということを聞いて、私も今後生かしていきたいというか、大事だということを改めて認識することができました。

最後になるんですけれども、今回のテーマが戦争ということもあるので、少し学徒動員についてもお話を聞きたいなと思っています。学徒動員のそれに至る経緯とか、大変だったこととか、1日の生活はどのようなものだったのかということをお話していただけたらと思います。

○岡山

その頃は戦争の末期ですね。少年兵、少年航空隊というんですか、飛行機がだいぶ良くなって、飛行士をたくさん養成しなくてはならないという国の要求があったんだと思うんです。私たちの仲間でも自ら志願して行かれた方がずいぶんありました。個人的なことを言って恐縮な

んですが、私は京都教会に属してまして、自らそんなところに志願するという気持ちは一切ありませんでした。だけれども20歳になりましたら徴兵があるんです。徴兵検査というものがあります。これは国の義務です。私は昭和20年に20歳になりました。これは本籍に関係するんですが、私は本籍が石川県でしたから石川県で兵隊検査を受けて、そこから三島野戦銃砲という所に派遣されました。4月ですから、わずか4ヶ月ぐらいしか経験がありませんが、そこで軍隊生活を送りました。行きまして、「これでは日本は負けるだろうな」と思いました。五年次兵という古い先輩の兵隊さんがいて、上等兵から伍長さん辺りが1つの班を持たされているんですが、それが非常に厳しい。わけもわからずに叩かれたり、夜の前後には必ず叩かれるということがありました。私は覚悟してましたからどううちゅうことはなかったんですけれども。

兵隊というか軍隊というのは非常に非合理的で、本当に意味のない所だったと私は思っています。でも、人を鍛えるということでは多少意味があったかなと思いますけどね。ま、そんなことです。

○山田

ありがとうございます。そういう時代が終焉して、岡山先生は福祉の実践の一步を築いて行かれたということです。すごい駆け足ではあるんですけれども、戦後から今日までを繋げているなお話を聞いたかなと思います。

私たちから聞くのはここで閉めさせていただいて、今日はたくさんの方が来られていますので、会場の方からもお話を聞いたうえで、岡山先生に答えていただけたらと思っています。清水さんが一番に質問をさせたい人がいるみたいなので、どうぞ。

○清水

じゃ、鈴木先生お願いします。

○鈴木

今日はありがとうございました。一言だけお聞きしたいんですが、田中昌人先生について、岡山先生がどんなふうに田中先生を見ておられたのか。お伺いできればと思います。

○岡山

私と田中先生は、実践のうえで直接関わったということは少ないんです。けれども、ちょうど田中先生が京大におられて、そこで、手の操作ですね。子どもの発達と手の動きの関わりは非常に大きいということを感じられていましたし、大津方式がその頃にできつつあったわけですが、妻の岡山英子もそれに関わっておりましたので、いろんな意味で、むしろ田中先生から

お教えをいただいたということが、私自身にとっては実態だったと思います。

○泉

田中昌人先生というのは、近江学園で、おそらく日本で初めて障害児の施設に研究員として雇われた方です。

○岡山

今、発達という言葉が出ましたが、私は本を出しているんですけども、何という本…自分の本の名前も忘れてるんやけど（笑い）、『要求で育ちあう子ら』²⁾です。私たちはその本の中で、子どもは要求をきちんと持ってないと育っていかない。要求を持つ前に私たちが大事にしなくちゃならないのは、その子どもが解放されているかどうかということです。ある抑圧なり、生活し苦しいとか、そういう気持ちをいつも持っていたら、子どもの力というのは外に出にくいわけです。ですから、私たちは要求を持たすよう努力すると共に、子どもの気持ちを解放させてあげることが非常に大事だと思います。甘やかしたら良いのかというのではないんですね。そこらへんが非常に難しいですけど、『要求で育ちあう子ら』で私たちが述べたのは、仲間集団と一緒に暮らす。つまり、集団の中で自分の力をどう出していくか。今で言えば学校、施設、そういう所で十分に考えられなくてはならないんじゃないかと思います。“発達”という言葉を使わなくても、私たちは子どもたちが力を伸ばしていけるような取り組みをしてきたというふうには思っています。

○泉

ありがとうございます。『要求で育ちあう子ら』は資料の5ページに載せている文献で、発達保障論であるとか、障害者福祉の実践でいろんなことを学んでいく第一文献になると思います。この文献自体は長らく表に出なかったんですね。それを2007年に何とか出版いただいたという経緯があります。先ほど奥さまの岡山英子さんのことをおっしゃっていましたが、田中先生と一緒に大津市で乳児検診を始められた方でございます。

次からは、会場におられる方に任意で手を挙げていただければと思います。何かご質問なり、感想なり、あるいは意見なりある方はおられますか。どんなご質問でもかまいません。

はい、学生さんですね。今現在実習中だそうです。

○学生 D さん

こんにちは。社会福祉学部3回生のDと申します。本日は貴重なお話をありがとうございました。1つだけ質問をさせていただきたいんですけども、糸賀一雄先生の「後になって、事が大きくなってから行動し始めるのでは悔いが残る。今、行動を起こすのは他の誰でもなく

自分だ」という言葉がすごく印象的で、今、世間が騒いでいる安保法制のことにも繋がってくるなと思ったんですけど、岡山先生は戦後70年を駆け抜けたソーシャルワーカーとして戦後の福祉の歩みを実際に見て来られて、今の日本の現状だったり、これから福祉はどう歩んでいくのかとか、どうお考えになっているのか聞きたいです。

○岡山

基本的に私は子どもが好きだったということなんです。今はこの年ですから特にボランティアもやってないんですけど、振り返ってどうだって言われると、自分なりには充実した生活が送れたなと、自己満足かもしれませんが思っています。それと、今のこの時代に私がなすべきことが残ってるとしたら、戦争をさせない世の中を作ることに関わりたいと思っています。どんなに考えても、人を殺める戦争というのは許してはならない。そういう意味では誠に申し訳ないんですけども、安倍さんは次の選挙では落ちてほしいと、落とすべきだと個人的には思っています。あまり良い返事にならなかったですけど、ごめんなさい。

○泉

先生は戦後70年、福祉の実践を続けながら、一貫して福祉の現場で働いて来られましたよね。その働いて来られた営み自身が平和を追及しているということで間違いはないんじゃないでしょうか。

○岡山

まあ、そういうふうに言っていただければ。でも僕にしてみたら取っつけたみたいなきっかけがあります。自分がやってきた仕事で充実しておれば、意味のあった生涯ではなかったかと。自己満足ではありますけどそう思っております。

○泉

まだ時間がございますので、どなたかお手を挙げていただいて。それでは通信教育を卒業された方々で組織をされています佛教大学社会福祉士の会の会長、T さんです。

○佛大社会福祉士会 T 氏

今、紹介していただきました T と申します。よろしく願いいたします。先生、本当に良いお話をありがとうございました。先日、私たちの会でも近江学園を訪問させていただいて、いろんな勉強をさせていただきました。そんな中で先生が一番大事にしていらっしゃる、障害を持っている子どもたちへの関わりが、私たちもすごく大事だと見ております。私は非常にとの立った卒業生でございますが、子どもたち、特に知的障害、ダウン症の子どもたちへの関わり

りというところで、私たちが大事にしなければならないこと、その子どもたちをほっておいたらどうなるのか、関わりを持てなくなるとどうなるのか、その子が将来的にどういうふうになっていったらいいのか、というところを先生のご経験の中で教えていただけたらと思います。

○岡山

難しい質問ですけど。大事なのは、普通の子どもさんでもそうでしょうけど、特に知的な障害の方なんかは、自分が認められているというんですか、自分はこの先生に認められている、こういう言葉はキザなんですけど、愛されているというんですか、そういう気持ちを持ってくれば、どんなに重い子どもでも、そういう気持ちは必ず生まれてきますし、作れていけるんじゃないかと私は自分の経験でそう思っています。

○泉

引き続き、これだけは聞いておきたいという方はおられませんか。おそらく一番現場に長くおられた方ですね。滋賀県で。現在生きておられるといたら失礼ですけど、常に障害者や子どもたちと一緒にいた先生なのかなと思うんですね。いろんな引き出しがあると思うんですけど、なかなかそこを引き出すのが大変なんですけど。

○学生 H さん

社会福祉学部2回生のHです。今日は貴重なお話をありがとうございました。岡山先生の話の中で、「かけひきのない気持ちとのぶつかり」という話が出たんですけど、受け止めがたいことがある時に、どういう対応をされていたのかということを知りたいと思いました。

○岡山

みんながそうであるわけではないですし、その人がいつもそうだとは思いませんけれども、やっぱり、子どもたちは自分を守りたいんです。自分を良く見せたいというか、守りたくて、自然に駆け引きをしてしまうことがあります。私は良い駆け引きというのはおかしいですけど、正しい要求であれば受け止めて、間違っておれば、そこで、その子に分かる言葉と分かる態度で、それを正さないといけないと思います。以心伝心は非常に親しくしておれば伝わるんじゃないかなと思います。良い答えになったかどうか分かりませんが。

1つ、非常に大事な、糸賀園長がいつも言っていた言葉を言いたいと思います。「情熱を持った人が歴史をつくる」これは、糸賀園長が何かの時には必ず、繰り返し私たちに言っていました。そういう意味で糸賀園長は情熱の人であったと思います。繰り返し、繰り返し、私たちにいろんなことを教えてくれました。

○山田

情熱を持った人ということで、岡山先生も情熱を持った人なんです。僕が岡山先生が70歳ぐらいの時に言われたことがあって、「山田くん、僕は70やけど身体は50ぐらいやからまだ頑張れる」って、70歳の時にそう言ってはったわけです。今は90歳でおられますけれども、90歳ってみんな、ちょっとイメージ違いますよね。だからたぶんご自身が70歳より若いと思ってられると思います。鳥取県立図書館に「情熱を持った人が歴史をつくる」の掛け軸もありますし、またそういうのも見ていただければと思います。

福祉は理屈も大事なんですけど、とにかく、情熱とか、気持ちとか、思いが大事ですし、その思いが、先生の「子どもが好き」という気持ちと、逆に「間違いを正す」という不正を許さないという気持ちの両面があったのかなと思って聞いていました。岡山先生は情熱の人であり、その情熱がずっと若さを保たれているのかなと思います。

○泉

引き続き、ご質問なり、ご感想なり、ございましたら、いかがでしょうか。障害者福祉の実践を現在やられている方々もおられるかなと思うんですけど、近江学園はできた当初から“働く”ということをきちんと生活の中に組み込んで、その発達を促していったということがあると思います。今は障害者の作業所等、就労継続B型とかいろいろ言いますが、そういう所で働いておられる方は会場におられますか。はい、何か質問ないですか。

○現場職員 O さん

左京区の障害者施設で働いています O と言います。私もサラリーマンを通じて福祉の勉強をかじって、いろいろ資格を取って今の職にあります。その中で、糸賀一雄と言えば、教科書に載っている歴史の偉人のような、あまり身近に感じるものがなくて、今日はその偉人の一面をちょっと感じられるお話を聞かせていただき、ありがとうございます。お話を聞いていく中で、仕事をおこなう上で情熱というのは大事なだと、振り返って、私も自分では情熱を持っているけれども、それがどれだけ熱いものなのか、これからもどんどん燃やしていきたいなと、お話を聞いていて思ったところです。先生は70年という長い期間、実践でいろいろ経験をされたと思うんですけども、その中で、困った時、くじけてしまいそうな時があったかどうか分からないんですけども、そういった時に、現場の人間として最終的に何を頼りに奮い立たせてこられたのかなというところを教えていただければ、私もこれから頑張っていける糧になるのかなと思います。よろしく願いいたします。

○岡山

みなさん方も学校での会議があったりしますし、職場でのそういう話し合いがあったりする

と思います。私たちはだいたい職員が10人ぐらいですかね、班会議がありましたし、班長会もありました。何かあった場合には定期的な会合だけではなく、個人的にも仲間に相談する。一番身近で分かってくれてる、問題を抱えている人ですから、仲間と一緒に物事を解決していくということを常に基本にしています。自分一人でするなんて知れてます。ですから、そういう仲間を大事にしていきたいなと思っています。

○泉

これは前回の『夜明け前の子どもたち』の映画を観ていただいた方は記憶にあると思うんですけども、例えば子どもたちが寝静まった後に、職員でかなり議論をしていますよね。それは『一次元の子どもたち』の中にも出てきました。絶えず、職員は集団でいろんな議論をしながら、困ったことやいろんなことを乗り越えてきたということがあったのかなと思います。

○岡山

それとね、今日の資料にも確かあったと思うんですが、シモちゃんという非常に重症の子どもですが、オムツを変える時に、そのシモちゃんがわずかに腰を上げたんですね。初めはそのことを看護師さんも何人かがやっているのが気がつかなかったんです。で、ふっと気がついた時にその看護師さんはすごい衝撃を受けたそうです。「この子はこんなにまでしているのか」ということなんです。私たちはそういう細やかな感受性を育てないといけないんじゃないかと思います。それと多少関わりますが、良い映画を観る。面白い本を読む。マンガも良いと思います。感性をどれだけ敏感に育てるかということも、私たちの役割1つではないかと思います。

○泉

感性をいかに磨くかということまで来ましたが、先ほど私が申し上げたかったのは、今の職場でそういうことが頻繁に行われるとは思いますが、少し職場を超えてそういう場を作ることが重要かなと思いますし、作業所であれば「きょうされん」とかいような仲間がいますよね。その中で少し乗り越えていくことができるんじゃないかなと思います。

最後にお一人ぐらい、質問の時間が残っていますけれども。どなたか。

○学生 I さん

はじめまして。社会福祉学部社会福祉学科1回生のIです。かなり緊張しています。これから福祉を学ぶ人たちに、何か学んでほしいこと、アドバイスとか、ありませんか。

○岡山

率直に言いますと、佛教大学に入る時に、僕は動機はなんでも良いと思います。問題はそれからですよ。自分は何のためにここにおるんだと、何のために私は佛教大学に入ったんだと、そしてこの社会福祉学科を選んだのかと、自分を見つめることができていないと、だらだらした生活、だらだらした人生になってしまうんじゃないかなと思います。もちろん福祉に入ったからには福祉のことを極めていく力は付けなくてはいけないと思いますが、基本的には福祉に関わる人は、人の心なり、人の気持ちが分かる人でないといけないんじゃないかなと思います。

○泉

「目覚めたる人の責任」と糸賀先生もおっしゃっていたと思うんですけれども、本学に入れたということは目覚めたということかなと思います。どうぞ、鈴木先生、田中先生、いろんな先生方がおられますので、一緒に学びながら育ってほしいなと思いました。

と、いう辺りで時間が参りましたが、よろしいでしょうか。まだまだいろんなことをお聞きしたいんですけど、時間的なこともございますのでこの辺でと思います。最後に山田先生からコメントをいただければと思います。

○山田

本日は2時間という長い間ありがとうございました。岡山先生からは貴重な話がたくさんあったと思いますが、教科書とか本で出てくる、例えば、糸賀先生だったり、近江学園の実践だったり、滋賀県の福祉だったり、というところには書かれていない、「人を大切にする」「情熱を持つ」であるとか、そういったことがすごく深く学べたんじゃないかなと思っています。岡山先生に今日来ていただいたのは、糸賀先生との経験をしゃべるとかそういうことじゃなくて、そういう中で岡山先生自身が、人生とか、生活も含めて、自分自身を作ってこられた、そういう意味で福祉の人になってこられていると思います。70年前はだいぶ前ですけども、今度はそのバトンをここにおられるみなさんが受け継ぐということです。なかなか難しいと思うんですけど、50年とかそういう中で働く。僕は今25年目で、岡山先生からしたらひよこぐらいになってしまうんですけど、みなさんはスタートにいるということです。教科書に書いてあることを学ぶことも大事ですけど、やっぱり人として豊かになることが大事ですよ、でも厳しさも大事ですよ、というところを学べたのかなと思います。今日のことを何かのきっかけにさせていただいて、みなさんが情熱を持って福祉をすることがより良い日本になるんじゃないかなと思います。岡山先生はいつも「わしは気持ち的には20歳若い」と言っておられました。若さを保ち続けるというのが福祉の仕事の魅力だと思いますので、ぜひ、そういう魅力を発信できる実践者になってほしいなと思いますし、また一緒に学んでいければと思います。

岡山先生、今日は本当にありがとうございました。準備からお家にお伺いしてたくさんお話を聞いていまして、今日もだいぶお疲れになったかと思います。最後に拍手でお礼をしたいと思います。先生、ありがとうございました。－拍手－

○清水

貴重なお話をありがとうございました。私も準備でお家にも何度か行かせていただき、写真もたくさん見せていただき、今日もたくさんお話を聞くことができ本当に勉強になりました。今日のことを一生忘れることはないと思います。本当にありがとうございました。－拍手－

○泉

座談会は以上でございますが、私たちがこの事前学習会で意図したことがみなさまに伝わりましたでしょうか。もちろん、この2時間で全てを伝えることは難しいと思います。戦後70年、現場の実践を積み重ねてこられて、感性を磨き、人を大切にする、気持ちや力をいかに引き出すか、という辺りでいろんなヒントをいただけたかなと思います。最初にお伝えしましたが、けれども、『平和と福祉』をテーマに考えていきますと、なかなか結びつかないんですよね。改めて、平和のために私は何をしてきたかなと思いながら、私自身もこの企画を進めてきた経緯があるんです。ただ、私たち自身が福祉の実践をする、そのこと自体が平和なんだというふうに、今日は思い至ることができました。

なお、本日の第2回事前学習会で終了ではなく、10月24日に福祉教育開発センターシンポジウム「平和と福祉」を開催いたします。そのシンポジウムの中では、戦争孤児の方々が当時どうであったか、どんな生活をしていたのか、どのように社会からひどい扱いを受けていたか、ということも調査の中で明らかになりますし、沖縄タイムズの方にも来ていただいて、沖縄の方がどんな苦勞をされたかという話しも出てきます。本学の植田章教授からは、障害者福祉に関わるさまざまな報告もごございます。ぜひ、10月24日のシンポジウムにもご参加いただけたらと思います。

それでは、以上を持ちまして『戦後70年を駆け抜けたソーシャルワーカー ～岡山喜久治氏からのメッセージ～』を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

注

- 1) 糸賀一雄 (1972) 「共に生き、共に歩み、共に育つ」『愛と共感の教育－糸賀一雄講話集 (増補版)』柏樹社, 66-68.
- 2) 田中昌人・「要求で育ちあう子ら」編集委員会 (2007) 『要求で育ちあう子ら－発達保障の芽生え・近江学園の実践記録』大月書店.

※今日、知的障害とされている用語は、戦後長らく精神薄弱等の名称で使用されてきた経緯があり、本稿では史実に基づいた表現を重んじ、当時の呼称を用いている。

